

# 「たなばた異伝」

十二歳の文学賞

応募作

# たなばた異伝

ゆうか

森の上から、光がさしこんでくる。その光を目を細めて見上げる。ふと、辺りを見回した。『風のおいが変わった。雨が、ふるかもしれぬ。』そう思い、スイは森をはなれて竹の里へともどった。家へ入ると、お母さんが昼飯を作っていた。

「ああおかえり、スイ。　また森へ行っていたの？」  
「ただいま。　うん、そう。」

スイが着ていた服は、着物みたいなものだ。でも、かたとそではつながっていない。あと、丈が膝上くらいまでだ。その上から薄く透けている、くるぶしくらいまでの布を、帯といっしょにまいている。その服を脱ぐと、真っ白な服をきた。ひざ上くらいの丈で、そではない。そして、あわいピンク色の帯をまいた。少し紫がかった床につくぐらい長い黒髪がさらさらとゆれた。ござの上にお母さんが昼飯を運んだ。

「スイ、昼飯を食べた後は、どこか行くのかい？」  
「うん、タクスといっしょに、川のほうに。」

「そうかい、気をつけるんだよ。」

スイは、焼きにぎりを食べながらうん、と小さく答えた。食べ終わると髪を結んで、外へ出た。

「スイ〜。」

むこうからタクスがかけてきた。スイはタクスの所まで行くと、川のほうへとむかった。さっきまでふっていた雨は、今はもうやんでいた。川はきらきらと光っていて、てのひらくらいの魚が底のほうにいる。スイとタクスは、川の底にある、石を拾いに来たのだ。じゃばじゃばと川へ入ると、突然の事におどろいた魚が逃げていく。川の水は冷たく、歩いて熱くなった足に心地よかった。石は、透明な物や、青みがかかった色があった。

今日の一番の石を決めると、水から上がるうとした。すると、首にかけていた勾玉の紐が切れてしまった。勾玉は下流へと流れていった。スイはすばしっこかったので、勾玉を追いかけて走っていった。すでに紐は見えなくなってしまうた。ずいぶん下のほうまで来てから、やっと勾玉をつかまえた。

川から上がって周りを見ると、人がいた。その人の所へ行くと、スイはびっくりした。髪の毛は四つの輪のようについてあって、かんざしや金色のものがついてゆれ

ていた。あわいピンクのような、白いような、クリーム色のようなふんわりした服を着ている。そのすそは幾重にもかさなっていて、ふわりと広がっていた。長細い帯のような物を身にまとっている。ような、というのは、帯というにはあまりにも軽そうだったからだ。スイには知らない物が多かったが、とても綺麗で高価そうだった。それは、よく絵巻物にでてくる天女の衣装そっくりだ。

スイはあっけに取られてみると、その女の人がきづいてふりかえった。女の方は、とても色が白く、美しい顔をしていた。

「あの、、、。」

スイが言いかけると、女の方は、びくりと体をふるわせた。すると、タクスが川の上のほうから来た。タクスも女の人を見ると、目をまるくしている。タクスがきて少し緊張がとれたスイは、女の人に聞いた。

「あの、こちらへんの方ではないですよ。名前はなんというんですか？」

女の方は、目をふせた。しばらくだまっていたので、スイは聞こえなかったのかと思った。もう一度言おうとした時に、女の方が、小さな声で、

「織女。」

と言った。それ以外はもうなにを聞いても答えてくれなかった。スイは、織女がなんだかほかの人と違うような感じがすると思った。よくは分からないけれど、清廉潔白という表現があうような感じだった。人が、皆善と悪を混ぜてもっているなら、この織女という人は、全てが白い、清い人だと思った。織女という名前もこの辺りでは全然聞いた事のない名前だった。

でも、どうしてもスイは、織女が行くあてもなさそうなのでとりあえず竹の里へ連れて行く事にした。そう言うのと、織女はだまっとうなずいた。

竹の里へ戻ると、スイはまずお母さんの所へ行こうか  
4  
ババサマの所へ行こうかまよった。タクスと相談して、まずお母さんの所へ連れて行ってからお母さんといっしょにババサマのところへ行こうと決めた。家に入ると、むかえに出たお母さんはスイとタクス同様目を丸くしている。お母さんは、スイとタクスを外へ出すと、入り口のすだれをさげた。二十分もたっただろうか。辺りが暗くなってきたところにお母さんが入って来なさいと言った。織女はおちついた感じになって、最初会ったときの顔のこわばりが消えていた。お母さんは、人を安心させるのがうまいのだ。

「今日はもうおそいから、明日ババサマの所へ連れて行きます。」

スイ、あなたも明日いつしよに行くのよ。タクスもね。

さ、タクスはもう家へお帰り。織女さんは今日は、スイの部屋に寝せてあげなさい。」

「わかつたわ。」

スイは織女を自分の部屋へ入れた。

「織女、とよんでもいい?。」

「はい。」

「織女は、あの、どうしてもここら辺の人には見えないんだけど、どうしてあんな所にいたの?あなたの故郷はどこかしら。」

スイが聞くと、しばらくしてから、織女は長くなりますが、と言って話しました。

「私の生まれ育った場所は、とても美しい所でした。」

そこで、機を織っていました。父様は、私の夫にと、牛彦という方を連れてきてくださいました。私は、牛彦様のことが、好きになりました。

私と牛彦様の住む場所は遠い所でした。牛彦様は牛を飼っていたから、夫婦になってもたびたび帰らなければなりませんでした。それを、私は、いかないでと、泣いて

おすがりしました。牛彦様は、やさしさゆえに、私の所にとどまってくれたのです。いけないと、心のどこかでは分っていました。

私は、そんな思いをまぎらわすために、毎日ただ無心に遊んで暮らしました。それを見ていた父様は当然お怒りになりました。牛彦様を、もともと彼が住んでいた場所よりもずっと遠い、知らぬ場所へと、連れて行ってしまったのです。私は、牛彦様をさがしに来たのです。」

織女は心がみだれぬよう、必死に平静をよそおって話しているようにスイには見えた。

「そう。でも明日、ババサマに会えば、すぐ見つかるわよ。それで、今までのことを悔い改めてちゃんとすれば平気よ。」

ババサマっていうのはね、この里をまとめている人なの。ババサマは、すごいのよ。なんでも、神々とお話できるって竹の里では言われているんだから。天帝と話したって噂だつてあるのよ。」

スイはわざと明るく言った。とたんに、織女は顔をあげた。

「あの、、、その、、、。ババサマという方は、あの、本当に、、、神々と話しが、できるのですか?」

スイは、それを聞いて織女が喜んでいるのだと思った。

「ええ、本当よ。それで今まで、この小さな竹の里を守ってきたの。昔は竹の里に何人かそういうことができる人がいたらしいんだけど、今はもうババサマだけよ。」  
そこで会話をとぎらせ、少し声をひそめていった。

「ババサマはもうとうに五百歳をこえているんですって。なんでも、ババサマは若いころ、占でこの里に神々と話す事のできる人がいなくなる事を知ったんだって。だから、神にお願いして、自分がいつまでもこの里にいて守り続けられるようにしたのだった。百歳まではふつうに年をとったんだけど、そこから先はもう何年たっても年をとらずこの里を守っているんですって。」

織女はそんな話など耳に入らないように何かを考え込んでいた。そして急にスイの肩をつかんだ。

「お願いします。私をババサマという方の所へはつれていかないでください。どうもご迷惑をおかけしました。私は一人で牛彦様を探しにいきます。私の事はどうか忘れてください。」

スイはそれを聞いてびっくりした。そして織女の言うとおりにしようと思った。そのとき、それとは別の考え



がスイの頭の中をかすめた。スイは、二年前の事を思い出していた。

二年前、スイにはひそかに思っている人がいた。でも、その年の冬は例年より厳しく、その人はなんでもないはずの風邪をこじらせ、ついには亡くなってしまった。それからスイは一人でいつも森の木の所にいるようになり、三日間帰らなかった事もある。けっしてスイにはもう届かない所へとその人はいつてしまったのだ。

織女の思っている人は、まだ生きて、どこかにいるというのに、会えない。薄く甘い期待を持つだけに、かえって辛いだろうと思った。それに、一人で探すなんて、無謀だと思った。織女はどうも、ここら辺の事にはなれていなさそうだったのだ。

あたしって、なんてお人よしでばかなんだろう。スイは、そう思わずにはいられなかった。でも、織女にひかれていて自分も確かにいると分かった。そして、言わずにはいられなかった。

「分かったわ。ババサマの所には行かないようにお母さんに言っというてあげる。あと私も牛彦を探しに行くの、ついていくわ。」

スイは一気に言った。織女はあわててとめに入った。

「あの、ス、スイ様までまきこむことはできません。父様がお怒りになつて牛彦様を飛ばしてしまつたのだから、それを探そうとしたらスイ様まで父様のお怒りをうけるかもしれません。そのような事はおっしゃらないでください。私ももしスイ様になにかあつたら、自分自身を責められずにはいれません。」

「スイ様なんて呼ばないで。普通に、スイでいいわ。それに、一人で探すなんて寂しいじゃない。大丈夫よ。私も武術の心得があつてね、竹の里じゃ、大の男にだって勝つた事があるのよ。足手まといにはならないようにするわ。」

「で、、、。」

いいかけて織女はやめた。きっとこの少女は何をいつても聞かないだろう。今日は、もう寝てしまおう。織女が寝る体勢をとつたのを見てスイも大上衣に入った。

まだ外の暗い早朝、織女はスイたちが寝ているのを確かめて外へ出た。草の匂いや川のせせらぎの音が聞こえる。新鮮な大気を織女は手を広げてすった。

「こんな早くに、なにを優雅にしているの。」

織女は驚いて後ろを振り返った。家の戸口のところにスイが立っている。

「え、いえ。あの。」

「もしかして、みんなが寝ているうちに一人で行こうとなんてしてないよね。」

織女は返答にこまった。まさにそのとおりだったのだ。

「私が昨日言った事忘れてないよね。」

「はい、、、。」

スイはちよつとまって、と言って家の中へいったん入ると、手に袋をもってでてきた。中には水と少しの食料とからの缶、小弓と矢。あと、火打石が入っていた。

「あの、これは？」

「だからいつしよに行くつて言ったでしょ。私、一度言つた事は取り消さない主義なの。これは、必要最低限のものよ。小弓と矢は、食料が無くなった時に、動物をつかまえて食べるのよ。まあ、小弓だから大動物は無理だけれどね。あとは、木の実かなんかを取って食べるの。」

織女はスイの大胆さに呆れ、驚いた。

「お家の方にはよろしいんですか？いなくなってしまうわね。それではご心配なさるでしょう。」

「家には置き手紙を書いてきたわ。それに、ずっと会えないわけじゃないもの。大丈夫よ。」

では、と織女が言って里を出ようとした時、スイはまって、と言った。

「なんででしょうか？」

「あの、タクスの所へいかない？ 私タクスの家、見ておきたいの。」

スイはお願いして織女の手をつかむとタクスの家へとむかった。タクスの家もスイの家同様、わらぶき屋根の家だ。すると、川の上流からタクスがおりてきた。

「あれ、スイこんな早くになにやってるの？ そっちの方は、ん〜と織女さんじゃない？」

「タ、タクス！ あなたこそなんでこんな早くに。」

「俺は目がさめちゃったから、少し川へ行こうと思っただけよ。」

俺はスイのほうがなんか変だと思うけど？」

「タクス私たち、おさななじみで友達だよね！」

スイはタクスが不思議そうにうなずいたのを見て言った。

「ぜーったい内緒にしてね。あのね、私も、織女の牛彦探しにいつしよに行く事にしたのよ。」

タクスは、呆れた目でスイを見た。

「スイは、ぜったい向いていないと思う。友達とかがたくさんいて、いつも人に接していないとスイはだめだろ。」

それに、二人で行くのは危ない。スイは考える事をあまりしないし。織女さんもスイも、この里をでたらほかの里や山の事なんて知らないだろ。スイなんてせいぜいこのくらいだろうが。」

スイはそれを聞いてそのとおりだと思った。この時初めて、もう少し勉強しとけば良かったと後悔した。タクスなら、森の事だっているいろ知ってるし、ほかの里や村、国にだって詳しい。タクスはさらにおいいうちをかけた。

「だいたい、なんで織女さんについていくなんて考えたの？俺に相談もしないで。もしちっぽけな理由で俺とこの里をおいて行くんだったら、それこそ許さない。」

スイは、織女に確認してから織女と牛彦のことを話した。「タクスは、二年前の事おぼえているでしょ？それと織女のことがかさなっちゃって。全然ちがうパターンなんだけど、思う気持ちは同じでしょ？あと、なんか、風が、風たちがね、いきなさい、って私を押ししてるみたいなのよ。こんなに風の事がはっきり分かって、私を強く押す事なんて今まで一度もなかったの。」

タクスは、この少女が絶対に自分で言ったことを取り消さない事をだれよりもよく分かっていた。はあとため息をつくとき、無言でスイの背中を押した。にやりと笑って、

「おい、スイは、ほかの里の事なんか全然知らないだろ。だから、俺がついてっちゃる。スイ一人で行かせたら危なっかしくてしょうがない。」

と言った。

「え、本当？あはは、実はそう言ってくれるのまっただんだ。」

タクスは、俺はスイにはめられたのだらうかと思った。

スイとタクスの考えなしで無鉄砲な行動から、三人の旅は始まった。でも、どこから出発すればいいのか分らない。スイとタクスは、織女を見た。織女は、困った顔をしながら一方を指差した。

「織女、どこに牛彦がいるか、分るの？」

「うーん、はつきり分るといいうわけではないのですが、なんとなく、こちらの方にいるという事が、分るのです。」

スイは、夫婦だからなのかなあと思った。するとタクスが小声でスイにささやいた。

「おまえ今、夫婦だからかなとか思ってるだろ。」

「なっつ。ちよつとかつてに人の考え読まないでよ。」

「あ、いて、人をぶつなよ。俺だって好きで分ってるんじゃないよ。」

つい声が高まってしまった。織女が、すまなそうに口をはさんだ。

「あの、早く行かなければ、人が起きてきてしまわれま  
す。そうしたら、お二人とも少々困るのではございませ  
んか？」

あ、と言って二人は織女の手を取ると乙女山へ向かって  
走った。

乙女山に道はなく木が密集していて山全体がかなり大  
きいので、竹の里の人でも近づかない。でもスイとタク  
スは小さいころからかなり奥まで行って、いつつも  
二人でかけまわっていた。木や岩を見ればそこがどこだ  
かすぐ分る。その時は無邪気にただ楽しく遊んでいただ  
けなのだけど、一度二つ向こうの里に出してしまった。帰  
りは迷いながら帰ってきた。スイとタクスが乙女山で遊  
んでいた事は二人とも内緒にしていたので、いつまで里  
で遊んでいたのと別の理由でかなり怒られた。

乙女山に入っただいぶ走ってから、三人はようやく止  
まった。辺りを見回すと、ここは泉に行く抜け穴の木が  
ある所だった。スイは、織女に聞いて織女が指さした方

角に取りあえず歩き出した。歩いているうちに、スイはいつもとは違う音が聞こえるのに気がついた。止まっていると、だんだんその音が近づいてきた。獣のひくくうなるような音。この乙女山には、りすや鳥といった小動物しかいないのに。袋から矢と小弓を出して身構えた。すると、茂みからどこかの山から迷いこんできた狼が一頭現れた。スイが矢をつがえようとすると、織女がすつと手を出した。そして、スイが止める間もなく狼に近づいていった。

「出ておいき。ここは、お前のくる場所ではないよ。さ、お行きなさい。もとの山へと、お帰りなさい。」  
狼は、後退して行って、ついには背をむけて走り出した。スイは、驚いた。ここんとこずつと驚きっぱなしだったけれど、一番この時驚いた。本来野生の生き物は、敵に対して背を向けない。それが、あんな風に去っていくなんて。織女は少し恥ずかしそうに言った。

「これでも、いえ。私にもこれくらいの事は出来るのですよ。」  
「これでもって。」

織女、これでもの次は、何て言おうとしたの？



織女は、言いかけてやめる事が多い。スイは釈然としな  
いものの歩き出した。

「ここから先は、道のわきがすぐ崖になつてるから気を  
つけて。」

スイは言った。風がここへくるといつも変わる。下から  
甘い匂いを運んでくるのだ。織女が来てからというものの、  
風がいつもと違う気がする。今も、いつもよりさらに濃  
厚な甘い匂いをはこんでくる。ふいに、風がこつちだよ  
と言つたように聞こえた。そつちの方へ首を向けて足を  
踏み出した。その瞬間。

「危ない！」

「きゃっ！」

足を崖から踏みはずしてしまった。タクスが手を伸ばし  
たが、その手とスイの手との間には、絶望的なほど距離  
があつた。そのまま崖の底へと、落ちてしまった。

スイは目を閉じながら、落ちたショックで硬く閉  
じてしまった。真つさかさまにものすごい速さで落ち  
ているのに、少しも地面につかないのを不信に思った。  
そう思えるほどに、時間はたつていたのだ。回りを見回  
す余裕が出来て目を開けて見ると、辺りは真つ暗になつ  
ていた。いつからか、落ちてもなくならどちらが上でど

ちらが下か分らなくなってしまうた。あるいは、空間に放り込まれてしまったのか。

「なにゆえ、我が底無谷へ入った。

我が住みかを荒らす者は、生かしてはおけぬ。言うてみよ。」

のぶとい、男の声だった。辺りを見回してもただ暗いばかりで、人の姿なんて見えやしない。声も、どこからというよりここ全体が話しているかのようだった。

「あの、私は、が、崖から足をすべらせて落ちてしまっただんです。」

「まぬけなことだの。だが疑いはせぬ。我の怒りにふれぬうちに、はよう地上へもどるがよい。そなたは風が使えるのだろうか？

出ていかぬば、わが住みかを荒らす者とみなすが、よいか。」

それを聞いて、スイは慌てた。慌てたが、あいにくスイには地上へもどるすべがない。

「あの、どうやって戻ればいいんでしょうか？」

「そなたはたわけか。このような話は無意味だ。二度とくるでないぞ。」

スイが返事もしないあいだに、さっと辺りが白く変化した。

上へと体が持ち上がっているようだが、息が出来ない。苦しくなってきたスイは、無が夢中で上へと上がるよう試みた。いつそう白く光っている所にするりと入ると、唐突に息ができるようになった。そして、どすんという地面の感覚が背中から伝わった。衝撃に声もでなくなつて、しばらくうごけなかった。

おさまって目を開けると織女とタクスのぞきこんでいた。

「おい、平気か？」

「うー。」

スイは自分が体験した事を二人に話した。タクスに自分がどうだったかを聞くと、こう言う事だった。

「落ちてる最中にいきなり黒いもやに包まれて姿がみえなくなつた。すると、こんどは一分もたたないうちに、白い光が筒のように浮いてきた。そのいちばん上の所から、スイが出てきて背中から落ちた。」

「スイ、タクス、こう言うのを御存じですか？」

別の世界にあると言われている日本という国に、八百万の神がおられます。八百万の神は、その名のとおり、木

にでも海にでも谷にでもたくさんの方に神がやどっているのです。底無谷にもおられます。スイが言われたのは、八百万の神でしょう。世界は違くとも、天帝のおられる場所は一つです。ならば、八百万の神を違う世界に御作りになられても、不思議はございません。」

スイには分らない単語があつた。

「や、ヤオヨロズ？ テンテイ？ なに、それ。」

「先生が一年前くらいに、いったただる？ ヤオヨロズは、八百万と書いて八百万。八百万と正確にいるかは分らないけど、それだけたくさんいたという事。天帝は、天の帝と書いて天帝。つまり、最初にこの世界を作り神々を産んだ一番初めの神。」

日本と言う国は、知ってるよな？」

「日本くらいは知ってるよ。なんでも、この世界にすぐくにてるんでしょ。」

「当たり前。天帝が違う世界に作りだしたから似ているというわけ。」

タクスとスイの小声でのやり取りを織女は笑いながら見ていた。聞こえていないつもりなのだろうけれど、前にいる織女にはよく聞こえた。

山はそれなりに険しく、大岩をよじ上った事もあった。織女はなれていないみたいで、スイとタクスで織女を引っ張ったりもした。織女はずっと機を織って暮らしていたのだから、無理もない。でも、かなり歩いただろうに疲れたとは一言も言わない。顔も、疲れているようには見えなかった。

草の茂みになっていて外からは見えにくい所を見つけたので、そこで寝る事にした。里では大騒ぎになっているだろうし、三人を探してもいるだろうから。

「タクス、薪を拾ってきて。織女、地面に寝るけど、いい？いやなら落ち葉を拾ってその上に寝るといいわ。私は、そこらへんにある木の実をとって、もって来た食料を食べる準備しとく。」

「おまえ木の実の種類わかるのか？この間これは平気とかいって食べて軽く腹こわしただろ。俺は食べなかったけど。」

「う。じゃあ、タクスが木の実とってきてね。あ、でも先に薪拾ってきて。もちを焼くから。」

タクスはうなずくと薪を拾いに行った。いくらもたたないうちにタクスが両手いっぱい枝を持ってきた。火

打石で火をつけて、もちを火の中に入れた。もちはそのままでは硬いが、火で焼くと食べれるようになる。

「はい。もちよ。織女、しってる？ よく吹いてから食べて。」

「ありがとうございます。おもちは、故郷では毎日食べていましたから知っております。」

スイはタクスにももちをわたした。塩気もなにもないが、甘みがあつてやわらかいもちはとても美味しかった。もちと木の実をたらふく食べておなかいっぱいになると、こんどは眠気がスイをおそつた。焚き火の後始末をしなればならなかったが、だんだんとスイの意識は遠のいていき、倒れこむようにして寝てしまった。タクスはため息をつくと薪をまとめて、焼跡が残らないよう落ち葉でかくした。織女も手伝おうとしたがタクスはいいから寝てろと言った。全て終わってからスイのとなりによつこらせとねっころがった。空は木々が密集していてほとんど見えなかった。もともとタクスは寝起きはいいほうだったから、すぐに寝てしまった。

真夜中。織女は完全に二人が寝てしまったのを見て、織女は少し離れた所へ行った。夜の森は暗く、ひっそり

とたたずんでいるかのようだった。こしをおろすと、織女は小さな声で、木にささやくように言った。

「牛彦様、、、、、、、。」

織女はしばらくそうしていたが、スイとタクスの所に戻った。

織女が突然起きたのでスイも気がついて起きてしまった。そのまま寝ようとしたのだけど、織女がどこかに行こうとしていたので気になってついていった。織女はしばらく座っていて、スイは戻って寝ようとした。が、その時に織女が、

「牛彦様。」

22

と言ったのが聞こえてしまった。スイは一瞬歩を止めたが、なにも言わずに戻った。横になりながらスイはため息をもらした。織女はスイ達がいる間は何にも言わない。でも、本当はきつと私が思っている以上に会いたいんだ。スイは思いを胸にかかえたまま、静かに目を閉じた。

朝スイが起きると、織女もタクスもすでに起きていた。タクスはスイが起きたのを見ると、木の実を取りに行った。

スイは、織女に二年前の事を話していないのに気がついていた。スイは織女の隣にこしをおろした。

「そういえば、私が織女についていく気になった理由まだ織女に言っていないよね。」

「一つは、風の事。風が、行けって私を押ししたから。それで、もう一つは少し長くなるんだけど。」

私、二年前実は好きな人がいてね。その人の名前は、武長っていうの。その冬は厳しくてね、武長、風邪をこじらせて亡くなってしまったの。私、その時はすごく悲しくて食事ものを通らないありさまだったんだけど、後になってからこう思ったの。今、武長はこの世界になつて、私たちを見守ってくれているんだって。それで、武長はもう会えない所に行ってしまったけれど、牛彦はまだ生きていてどこかにいるんでしょ。私も悲しい気持ちしっているから、織女は牛彦に絶対会わせてあげたいって思つて。それで、旅についてきたの。」

そんなことがスイにあつたなんて。織女は言葉が出なかつた。スイはそんな様子には気がつかずに、タクスが持つてきた果物を楽しそうに物色している。

スイ達は食べ終わるとすぐに荷物をまとめて歩き出した。しかし、歩いて少したつと、急に雨がふりだしてしまった。近くに洞窟はなかったので、大木の下で雨宿りした。スイは一刻も早く出発したかったが、雨脚は衰え



なかった。それどころかどんどん強くなってきて、木々の密集している森の中さえもビシバシとたたきつけてくる。

けつきよくその日は雨続きだったのであきらめて、早々と寝てしまった。

スイが朝目覚めるとまだ二人とも起きていなかった。三人ともばらばらのかっこうで寝ていた。

「最初はみんなちゃんと並んで寝たのに。うわタクス寝相わるう。・・まあ、私も悪いけど。」

確かに最初はちゃんと並んで寝ていた。それを、スイがタクスをけつたりなんだりしながら大移動を始めて、タクスはそのとばかりを受け変な方向に転がっていったのだ。だが、スイはそんな事知るよしもなかった。

スイはしばらくその辺を歩いて果物や木の实を取った。するとタクスが起きてきて、織女がそのすぐ後に起きた。

「朝は、果物を食べよ。タクス、もしも食べられないのがあったら、言ってね。」

「はいはい。」  
タクスが見ると、食べられないのは3種類もあった。

「こんなに毒のあるのがあるじゃないか。まったく、スイと職女二人でいったらどうしてたんだよ。」

「二人じゃないからいいの。それに食べられるのは五種類もあるじゃない。」

スイは黄色をした果物を口に入れた。すつきりした甘さが口の中に広がっていった。織女はスイにわたされた黄色をした果物をしばらく見ていた。

「あの、これは何と言う果物なのですか？」

「あら知らないの？これはね、木苺という果物よ。」

織女は一粒つまんで口に入れてみた。織女は、びっくりした。そもそも織女が住んでいた場所では果物というのはあまり食べない。食べるとすれば、桃と梨くらいだ。

スイはそんな織女の様子を満足げに眺めていた。タクスも、さつきから夢中でほおばっている。スイは、織女に聞いてみた。

「ねえ、織女は何の植物が一番好き？」

「私は、ささのが好きです。さらさらと揺れる、ささのが。」

へえ。織女、ささのが好きなんだ。

いつの間にか果物が無くなってしまっていた。スイとタクスで、そろそろ行くかと、荷物をまとめていた時だった。

急に風がとまった。すると織女が険しい顔をして空を見つめた。空の一部分だけが曇って、ついには真っ黒になった。その黒雲からからすが出てきた。

「織女。そんなところで何をしている。その者たちはだれだ。」

からすの発する声に感情はなく、ただ淡々と言っていた。織女はからすをにらみつけた。

「牛彦様をお探ししているのです。この方達は、私のために里をはなれて来てくださったのです。父様もからすなどおつかいにならずに、ご自身でまいられてはいかがです？」

26

「大ばか者。織女、すぐに戻って来い。いやというなら、この場でほかの者を闇へ葬り去ることだ。だってできるのだぞ。」

タクスには二人が何を言っているのかさっぱり分らなかった。スイを横目で見ると、こわばった表情をしていた。

スイは最初は何を言っているのかが分らなかった。ただ、風がさわさわとおちつかなげに吹いていた。風の言葉を読むこつをつかむと、最後にかからすが言った事だけ分かった。

『ほかの者を闇へ葬り去ることだつてできるのだぞ』  
闇に葬り去るつて何？ どのような意味？

あのからすは何？ 織女を、、、

自分の顔がその言葉を聞いたとたん瞬時にこわばつたのが分つた。もう何がなんだかわからなくなつた。すると、周囲がもやつて、織女の姿が消えた。それを最後に、スイの意識はなくなり、糸が切れたように倒れた。

タクスは、織女が消えたかと思うと次はスイが倒れたので、心臓が止まるかと思つた。スイの呼吸と脈を調べて、それでようやくおちついた。体温がいささか低い気もするが、たいした事ではない。

スイはまどろみの中で己をよぶ声を聞いた。

『スイ、スイ。聞こえますか？

私よ。私は一度戻らねばなりません。

やはりこの事は父様のお怒りにふれてしまいました。これ以上は危険でございます。』

だれ？、、、この声、知っている。彼女は、彼女の名は、職、、、。

「織女！ 何で、どこに戻るの？ 今、どこにいるの？」

『私がこれから行く所は、とても遠い所。今は、スイの夢に入って声だけお届けしているのです。さ、よくお聞

きなさい。スイ達はもう里へ戻ってくださいまし。スイは風が使えるのですから、里へ帰るのは簡単だと思います。』

「なに言ってるのよ。言ったでしょ、私は一度言った事は取り消さない主義だつて。このまま織女をほおつて戻るなんてことしてごらんなさい。一生気にする事になるのよ。そんなのごめんだわ。一度頭をつつこんでしまつたいじょう、事のでんまつを見届けないと私の気が休まらないのよ。」

「、、、それでも、私は一度戻らなければなりません。私がいる場所には、スイ達はこれません。そして、私はここからスイ達のいる所へは戻れないかもしれませんが、、、。さ、スイは里にお戻りください。』

「ま、まつてつ。」

あわてて呼んだが会話をシャットダウンされて、スイは深い眠りへと落とされた。

「おい、スイっ起きろ、おいっ。ああ、もう、どんだけ眠ってたんだよ、、、、、、織女もないしっ。」  
タクスは文句をスイに向ける事にした。

「もう何がどうなってるんだ。いいかげん起きろ。織女はどこに行っただ。どうして俺だけ何も分らん！スイ、起きろ！！」

「う、、、、、、。」

一声うめくとまたスイはすぐ、くかーと寝てしまった。みけんにしわをよせるとタクスは無言でスイの肩をつかんだ。そして、思いつきり揺らした。

スイは一気に目がさめて、あつと言って頭をがばつとあげた。とたん。がんつという音とともに、大きくのけぞった。頭がぐわんぐわんとゆれて、頭を抑えたまま一言もはっせられなかった。

「、、、、、、、っ」

しばらくたつてからスイが声を張り上げた。

「里に、、、戻らなきゃ。あ、いや違う。戻っちゃだめなんだっけ？」

いや、戻るの？え、な、何をするんだっけ？

あーもう、タクス、忘れちゃったじゃないのよお。すっごい大切な事だったのに。織女は、あ、織女は行っちゃったんだっけ？

え、あれ、あれえ？もうっタクスのばかあっ！！」

ものすごく混乱している。ただ、聞きずてならないフレ  
ーズがあつた気がする。

「なんだよ。たいへんだつたんだぞつ。織女は消えるし、  
スイは気を失うし。昼ごろきたらスイはまだ寝てるから  
起こそうとしたんだ。これのどこがばかだよ！」

一応スイは黙りこむ。気を失うまでは覚えてるんだけど、  
夢で織女が来たような気がする。それでなんかいったん  
だけど、なんだつたかなあ。もともとスイはあまり考え  
るのが好きではなく、楽天的な性格だった。

「もう。ま、いいや。なるようになるんだし。とりあえ  
ず梅の里行こう。」

こんなのでいいのだろうか。夢の部分は、かなり大切だ  
と思うのだけど。しかも行く場所を間違えている。タク  
スは呆れた。

「……スイ、梅の里ではなく樹香の里だ。梅の里は  
竹の里のすぐ隣の里だろ。すぐに見つかるぞ。」

そうだつくと一言返してスイはずんずんと進んでいく。  
いつもの道を行こうとすると、風が必死で抵抗する。少  
しずれた方向へと導いていく。

こ、、、、「う、ち、、、い、、、って。いけ、  
ば、、、わかるから。」

スイはおぼろげながらもはっきりと風が言っている事が分るのに、少し感動した。風としゃべれるなんて。なんかタベ織女の言っていた、風を使える、てことが分かった気がするよ。そこまで考えて、スイははっとした。いつ？いつ、織女がそんな事言ったの？タベはもう、織女いないのに。なんか分かんないけど、分かるというか。混乱してきたので、考えるのをやめてとりあえず風の方へ行く。

「スイ、道が違うぞ。なんかやけに自信たっぷり歩いているけど。」

そう言われてやっとスイはタクスの存在を思い出した。自分の考えにふけるとほかの人を忘れる事がよくある。

「あれ、タクスイたんだっけ。風が、こっち行けって言うのよ。こっち行って。いけば分るから、って。だから、風の言うとおりにしようと思って。」

タクスは不思議そうにしながらも黙ってついてきた。しばらく行くと、風が止まった。辺りを見回すと、草やつるの間から明かりがもれている場所があった。草をかき分けると奥が洞窟のような所になっている。中に入ると人がいた。タクスが一步踏み出すと、下に落ちていた



小枝がばきつと折れた。その音で奥にいた人がきずいて振り向いた。

「お前たちはだれだ！！」

ずいぶんと小柄な、少年だった。激しい目で、こちらをにらんでいる。近づくにつれて子供だと思ったのだから、警戒心が少し無くなった。

「、、、、お前たちはだれだ。俺に何の用がある。」

洞窟の中は不思議な物がたくさんあった。変な文字みたいのが書いてある紙がそこら中に張ってあるし、手には円盤のような物をもっている。着ているものもなんだか妙だ。スイは逆に聞き返した。

「あなたはだれ？なんでこんな所にいるの？」

「質問に答える。」

「あたしはスイ。あっちがおさななじみのタクスよ。特に用はないけど、風がこっちに行けば分るからって言ったから来たの。」

しばらく少年は悩んでからくりとこちらに背をむけてしまった。スイは困った様子でタクスを見上げたがタクスも首をかしげている。しばらく重苦しい沈黙が流れてから少年がこっちに向き直って口を開いた。

「一応名のつて多く。俺は羽虎。スイ、お前さつき、風が言ったから、と言ったよな。お前、風使いなのか？」  
「うん、まあ一応、、、多分。何？」  
さつきからじつとスイを凝視している。

「兄上に会わせてやる。来い。」  
とりあえずついていく事にした。方向から考えても、きつと羽虎の兄上というのは樹香の里にいるのだろう。数分も立たないうちに、ぱつと森が開け目の前に里があった。あの道をいくとこんなに早くこられるなんて。覚えておこう。無言で羽虎はずんずん進んでいく。

「タクス、こんな道あるなんて知ってた？」  
「いや、全然。驚いたな。樹香の里にきたのもかなり前のあれいらいだし。」  
いつの間にかスイ達の前には家があつて、羽虎はその中に入った。

「兄上。人をつれてきました。どうも、風使いらしいのです。」

兄上と言われた人がふり返った。歳は二十代前半くらいだろうか。黒い髪に黒い目が印象的だ。スイ達も色がたくさんあるわけではないが、大抵は黒に少し何色がまじっている。

「風使いと言うのはほんとうかい？」

「たぶん、本当です。あ、あの、あなた達は何なんですか？」

「飛虎と言う。何、と特定しては言えないな。まあ、いろいろな事が出来る、と思ってくればかまわない。」  
「いろいろな事、ということは、記憶をもどせたりもするのかな。」

でも、出来ないといわれたらなんか恥ずかしい。

「あ、あの、いろいろな事、というのは、例えばどんな事ですか？」

くす、と飛虎は笑った。

「なにかやってほしい事でもありそうな感じだね。何でもいいから、言ってみてごらん。」

「じゃあ、忘れた記憶を戻す事は出来るんですか？」

スイが前のめりになって聞くと男の人はうーんとうなつた。やっぱり出来ないのだろうか。すると意に反して飛虎は出来る、と返した。

「ただし、出来る範囲がある。例えば、生前の記憶を出せと言われても、それは出来ない。産まれてすぐとか、記憶があやふやな時も、出来ない。その戻してほしいというのは、いつのこと？」

スイは、昨日見た夢と返した。やってみるかと言うと飛虎は、スイを寝かせた。四方に石を置いてそれを白い砂でむすんだ。

男の人がなにやら言い出したとたん、眠くもないのにいきなり眠りの谷へとつき落とされた。そこら中にもやが濃くかかっている、何も見えないし聞こえない。スイはここが何処なのか分らなかった。ましてや、これが夢の中だとはまったくきずかなかった。なんか、どこかで声がきこえる。あまり、遠くない場所から。でも、どこだか分からなくてもどかしい。風もここではまったく感じられない。座り込んで下に手をつくると、唐突に声が聞こえるようになった。

《織女!?》声を出したつもりなのに、声が出ない。織女は、一方的にしゃべりだした。

「スイ、スイ、聞こえますか? 私よ。私は一度戻らなければなりません。やはりこの事は父様のお怒りにふれてしまいました。これ以上は危険でございます。」  
すると今度は自分自身の声が聞こえた。

「織女、何で、どこに戻るの? 今、どこにいるの?」

「私がこれから行く所は、とても遠い所。今は、スイの夢に入って声だけお届けしているのです。さ、よくお聞

きなさい。スイ達はもう里へ戻ってくださいまし。スイは風が使えるのですから、里へ帰るのは簡単だと思います。』

これは、夢？でも、この会話どこかで聞いた事があるよ  
うな気がする。

『なに言ってるのよ。言ったでしょ、私は一度言った事は取り消さない主義だつて。このまま織女をほおって戻るなんて事してごらんなさい。一生気にして生きていく事になるのよ。そんなのごめんいわ。一度頭をつっこんでしまつたいじょう、事のてんまつを見届けないと私の気が休まらないのよ。』

『、、、それでも、私は一度戻らなければなりません。私がいる場所には、スイ達はこれません。そして、私はここからスイ達のいる所へは戻れないかもしれません、、、。さ、スイは里にお戻りください。』

『ま、まっつてっ。』

そうだ。これは、私が忘れていた夢の内容。ものすごく眠かったけど、ここで寝たらまた忘れてしまいそうな感じがして、落ちそうなまぶたを必死で上げていた。でも寝ると強制されているようでそれもできなくなってきた。最近本当に寝てばかりだなあなどとどうでもいい

事を考えてしまう。ええい、もうしょうがない。眠いものは眠いんだ！と腹をくくって寝る体勢に入った。すると、目が覚めた。眠いはずのまぶたはぱっちりして、周囲の情景を鮮明に映し出していた。上体を起こすと、飛虎がふり返って笑った。

「記憶はもどった？」

スイはうなずいた。改めて中を見回すと、ここはごく一般の家となんら作りはかわらない。

どうして初対面の私達にこんなに親切にしてくれるのだろう。すると飛虎がスイの方を向いた。

「実は、風使いの君に頼みたい事がある。私の姉上が森に入ってから戻らなくてね。風を少し読むくらいの事は出来るから、君の風で姉上をここまで連れてきてほしいんだ。この一週間、風使いを探していたんだ。まさかこんなに早く見つかるとは思わなかったけれどね。」

私、そんなすぐ技出来ないよ。そりゃあ、記憶もどしてもらったし出来る事ならやってあげたいけど。そもそも、人を風で探すって、どうやるの？そんなスイの数々の心配はすべて打ち消された。

「実際やるのは、私たちだよ。ただ、私と羽虎の風じゃあ、あまり遠くまで飛ばせないし気配が弱いからきずか

ない。だから、君の風を借りたい、というより、君の能力を借りたいんだ。君は、何もしなくていい。」

へえ、じゃあ簡単だ。何のためらいも無くスイは承諾した。急ぎたいのは山々だが、お礼は返したい。スイはまたさっきの四角のなかに横にさせられた。対角線の上に羽虎と飛虎が立って、砂時計を持っている。砂時計を下に置いたとたんスイの中から何かが出てきた。それは、自分自身だった。いつの間にか意識が横になっているから浮いている方へと移っている。自分の回りに風がものすごいたくさん集まってきた。髪が煽られていてうつとおしい。その風が一方向へむかっている。なぜだかスイには風の行く場所が分かった。森だ。乙女山とは別の、北に位置する森。それほど大きくはないが、入り組んでいる。息が上がってきた。と、その森に、人影があった。風は迷わずその人の所へいき、少したつてからこちらにもものすごい速さで向かってくる。この速さでは追ってこられないだろうに。風が戻ってきた瞬間、スイも自分の体に溶けていくように戻った。疲れてしまつて、体がだるく感じられた。回りを見るとタクスと羽虎と飛虎がいた。タクスがスイの所まで来た。スイはなんとか体を起こすと、タクスに何？と聞いた。

「俺には、何がどうなったのかまったく分らないんだけど。」

「えーっと、何だか自分の中から、、、魂かな？魂がぬけて、風がすごい速さで森に行つて、姉上つて人を探して、またすごい速さで風が戻つてきて、魂も戻つたの。」

ダメだ、、、。説明になつてない。疲れているし不思議な出来事もよく分らないし、説明できない。タクスはさらに分らなくなつたみたいだった。飛虎がそんな様子を見かねて口を挟んでくれた。

「今は、魂ではなくスイの能力の部分を引き出したんだよ。すごいね、具現化できるくらいあんなに濃い『力』は初めてだよ。ただ、これはものすごく体力を使うから五分が限界なんだ。それ以上やると、その人の生死にかかわるからね。スイも疲れているだろう。」

それでこんなに疲労感を感じるんだ。じゃあ、もし力を私が見えるようになって、使ったらやっぱりこんなに疲れるのだろうか。それを聞いてみると、羽虎がフンと笑つていった。

「そんなわけないだろう。いちいちこんなに疲れてたら身がもたないじゃないか。それくらいわからないか？今は、俺達が無理やり引き出したから疲れてるだけ。スイ



は自分で使えないんだろうと思ったから、強行手段に出たの。でも今回の能力が覚醒したからきつと使えるようになる。感謝しろ」

ずいぶんと偉そうな口調だ。でも、そう言うからにはきつとそうなのだろう。羽虎はウソは言わないと思う。、、、、多分。

いつまでも　と言ってもまだ一日だが　ここにいるわけには行かないのでスイは今日は羽虎と飛虎の家泊めてもらって、明日の朝出ていく事にした。そう言うと、羽虎と飛虎が提案した。

「もし急ぎじゃないなら、何日間かここにいたらどう？  
姉上にも会わせたいしね。行くあてもないのでしよう？  
あ、悪いけれど、スイの記憶を戻しているときの会話は全て聞いたからね。というより、聞きたくなくても聞かせてしまっただ。」

スイはどうしようかと思った。たしかに、行くあてはないしこの里に知り合いもない。タクスにも聞いてみるといいんじゃないかと言ったのでありがたくそうさせてもらうことにした。スイは飛虎の姉上の部屋に、タクスは飛虎の部屋に泊めてもらう事にした。部屋は何処でも自由に入っていていいと言われた。スイは部屋にはいつ

て、ゆっくり休み事にした。ただ休むだけのつもりだったのに、寝てしまった。

朝、スイはばたんという音に目を覚ました。居間に行くとすでにタクスと飛虎がいて、その前には金髪がふわふわと広がった、とても美しい女性がいた。きつとあの人が飛虎の姉上なのだろう。タクスのとなりまで行き、小声でタクスにいった。

「飛虎の姉上って、すっごい美人だね。ものごしも優美だし。タクス、胸がトキメクんじゃない？」

「ゼーんぜん。」

そうは言っているものの、少し頬が赤らんでいるのをスイは見逃さなかった。女の方は色っぽい声で飛虎に話しかけた。

「森からでられて良かったわあ。あそこ、方向とかが分らなくなっちゃうんだもの。あの風、飛虎のじゃないわよねえ。まあ、その人たちはどなた？」

飛虎が軽く事情を話すと、女の方は面白そうに笑った。

「まあ、この子が風使い？ あらあ、風使いなんて初めて。部屋を使うくらいいいいわよ。あなた達の話も聞かせて。あたくしは飛虎の姉の風麟よ。」

風麟はそう言うとスイの手を掴んで部屋へ連れていった。飛虎はハアとため息をつくと呆然としているタクスにこういう人なんだと目くばせした。

何回か記憶をたどるといふ事をしようとしたが、そのやり方がわからない。話も聞けず目新しい事は何も無く、ただだらとすごしていくうちに早くも一週間たってしまった。スイとタクスはあせっていたのだが、風麟はスイの話の聞いているばかりだった。飛虎と羽虎も姉上しか分らないというので風麟が話す気になるまで辛抱強く待つしかなかった。

今日も例にもれず部屋でスイは風麟と話していた。

42

「ねえ、あなた風使いなんでしょう？ほかには、どんな事が出来るの？あ、でも才能がまだ目覚めてないのかしら。一週間まえには飛虎の気配がまざってたもの。でもね、大丈夫よ。一回開花させちゃったら、すぐ使えるようになるもの。あたくし、一度でいいから女の子の風使いに会ってみたかったのよ。」

「え、じゃあ、ほかにも風使いって何人かいるのですか？」

スイは自分だけの特殊技能だと思っていたから、風麟の言葉は意外だった。

「いるといえはいるけど。今は、あなたしかいないのよ。あたくしたち三人はほかの人よりも寿命がとて長いみたいでねえ。これでも、二千六百五十二才なの。だから、何人が風使いに会っているのよ。同じ時に風使いが複数いるわけではないわ。」

スイはハートマークが着きそうな言葉に衝撃を受けた。にせんろつぴやくごじゅうにさい。じゃあ、飛虎とか羽虎も軽く二千三百とか超えているのだろうか。タクスは二千六百を超えている人にトキメいていたのか。この事タクスに言ったら、どうなるんだろ。

風麟は固まっているスイを見て満足げに笑っていた。風麟はスイが織女の所へ行くヒントをくれた。

「あのねえ。きつとその織女って人、神様だと思うのよ。あなたの話を聞いてみると、どうもくわしすぎたり、人間技ではないことをやっているもの。」

「え、、、じゃあ、、、」

スイは困惑した。確かに、織女の言動を考えれば神だということとは分っていた。しんけんな目で風麟を見つめると、スイは言った。

「その、どうやって神々の世界へ行くかとか、そういうことを知っていませんか。もし知っていたら、教えてほしいんです。」

風麟は内心で小さく笑った。やっぱり、スイは神だと知っても織女のもとへ行こうとしている。でも、かわいそうなことだ。あいにくと自分は神々の世界へ行く方法なんて知らない。この世界中どこをさがしても、人間が神々の世界へ行く方法なんて知っている人はいないだろう。

「人間は、神々の世界へは行けないわ。、、、ただ、織女に言葉を伝えることは出来るの。」

「ど、どうやってたら伝える事ができるのですか！」  
行けないと聞いてスイは落胆したが、言葉だけでも伝えられるのなと思いついた。

「深い眠りに落ちるの。そして、眠りよりもさらに深いところ、神々のすそに行くのよ。本当に強く思うのなら、思った人に言葉を伝える事ができるわ。」

スイは、その事を聞いて初めて前に前進したような気がした。タクスに知らせなくちゃ！そう思いタクスの部屋までかけていった。

「タクス。聞いて。人間は、神々の世界へは行けないんだって。でも、言葉を伝えることはできるの！」

「本当！？」

スイは風麟に聞いたことをタクスに話した。

「その話を聞いて、初めて前に前進できた感じだった。」  
「さすが幼なじみ。考えていることが同じだ。妙な事に感心しているスイに、タクスは言った。

「けれど、スイしか出来ないんだろ。すごい大役だぞ。」

「大丈夫！！織女のためだもん。頑張るよ！！」

スイは今日はやらず、明日やる事にした。心配だったが、  
急ぎすぎるのはかえって良くない、一度なんて言うかとか  
じつくり考えてみる、と言った。

「起きろーっ！！」

耳元で叫ばれた上に、寝具までひっぺがされてはさすがのタクスももう寝たふりは出来なかった。さつきからはたかれる事五回、叫ばれる事七回。ほうきでたたかれた時には俺はゴキブリかと思った。昨日は部屋に入っただけに蒸し暑くなって何度も目が覚めてしまった。明け方になってやっと落ち着いて眠れるようになったのに。寝不足の目でスイを見上げたが、スイは一向に気にしない様だった。一方のスイは良く眠れ、しかも今朝は起こされずに目が覚めたので、気分がいい。

「タクス、いつまでねてるの。朝餉が出来てるよ。今日は織女に言葉を伝える大事な日なんだから、体力つけておかなきゃ。」

スイはタクスの手を掴むと問答無用で連れていった。居間に行くとしすが言ったとおり朝餉が準備されていた。風麟がくす、と笑って言った。

「すごい顔をしててよ。朝餉は待っていてあげるから、川で洗っておいでなさい。」ぼけらつとした顔のまま、タクスは言われたとおりにした。タクスが出ていくのを見てからスイは眉をよせた。

「ほんつと朝からまのぬけた顔をして」

スイは一人つぶやくと、出された飲み物を一口ごくりと飲んだ。

「ーーーーーっ」

スイはその瞬間声にならない叫び声を上げた。ものすごく苦い。以前、間違つて青汁を飲んでしまったが、それよりも苦い。飲み物は透明で、無臭だったので水かと思つた。げほつとせきこんでしまったそれを見た兄弟&姉があららーという顔になった。

「スイ、それは姉上の薬湯だぞ。そんなもの飲むのは姉上しかない。」

「まあ羽虎、失礼ねえ。あたくしだってそのまま飲んだりしなくてよ。それに花蜜を入れると美味しく、美容と健康にいい一品物になるのよ。」

うふつと笑った。もののみごとに固まってしまったスイに飛虎が水を出してくれた。

「姉上意外は一度はこういうことになるんだよ。姉上、だから透明にするのはやめてくださいと言いましたのに。」

ぎしぎしときしむ手で水を飲むと少しだけ落ち着いた。だが、そうかんたんに取れるものではない。まだ口の中で苦味がくすぶっていて、気分がものすごく悪くなった。そこに、なんと間が悪いことにタクスが来た。事情を知らないタクスはスイにきいた。

「スイ、何そんなに怖い顔してんだ？」

普段なら何でも無い言葉に怒りをおぼえたスイはまだ花蜜が入ってない薬湯を持って怒号をはりあげた。

「どうせ私はいつでも顔が怖いわよ！！」

タクスの口をむりやり開けると、その口に薬湯をすべて流し込んだ。タクスはスイ同様ピーンと固まると目を開けたまま青ざめた顔で気絶した。あからさまなやつあたりだ。あまりのスイのやりように、傍観していた三人



は後ずさりした。庭に出たスイは大岩にジャンプして飛び乗るとふてねを決め込んだ。やることは子供っぽい、ジャンプ力はものすごかった。軽々と大岩に飛び乗ったのだから。風麟は忘れられていたタクスの存在を思いだしタクス救出へと向かった。

ふてくされて風に吹かれているうちに、スイはだんだんときげんが良くなってきた。しばらくは意地をはっていたが、考える余裕がでてくるとなにか大切な事を忘れていたような気がしてならない。

「ねえ、何を忘れてるんだろ。分らない？」  
だれにと言うわけでもなく声に出してみた。すると、風がゆれた。は、、、た、、、お、り。機織り？私、機なんて織れない。それとも何か別の物だろうか。別の物、、、者。

「あっ！」  
織女だよ。どうして気になっていたのか分った。今日の朝、織女に言葉を伝えるという大役をするはずだったんだよ。いそいで大岩を飛び降りると居間に入った。居間ではタクスが水をもらっていた。

「風麟、お願いします！今すぐ、眠りへと落として下さい。」

スイは最初だけ風麟の力で眠りへと落としてもらった。スイは暗闇の中にいた。のばした手の先すら見えないくらい濃厚な闇だった。スイは、一身に織女に言葉を伝えられるようにと願った。ふと顔を上げると、暗闇の中、そこだけ切り抜いたように丸く光っているところがあるのに気がついた。スイの体はその光に吸い込まれた。光のなかに見知らぬ男が一人いた。でもそれが本物ではなく、映像だという事がすぐに分った。その傍らには風麟がいる。男が口を開きかけた瞬間、暗闇へと引き戻された。すると今度は別の方向に光がもう一つうかんでいる。こんどはその光の中へ入った。その光の中には別の、少年という感じの男の子がいた。森の中を歩いている。一秒ぐらいの間に暗闇に引き戻されるとこんどはまた別の方向にもう一つ光がある。そういうように、光へ入っては見知らぬ男がいて、そのすぐ後に闇へ戻されるという事が何回もある。そのたびに丸い光が三つ、四つ、五つ、、、、十と増えていく。中には老人から七歳くらいの子もいた。このたくさんもの映像が何なのかスイにはもう分っていた。この映像は歴代の風使いだ。きつと一番最初に見た男がスイの前世なのだ。最初こそおもしろかったが何人も何十人もみていくうちにあきて

きて、数も分らなくなってきた。そんな矢先に、ぽかっと、織女の映像がうつった。織女だけ、やけにリアルで本当にいるのかと思った。

「織女！」

スイが叫ぶと映像の中の織女は、不思議そうな顔をした。

スイは今きつと、織女に言葉が伝わっているんだと思い、夢中で言った。

「ねえ、織女聞こえる？織女は今、神々の世界にいますでしょう。戻ってくるのは難しいのだろうけれど、絶対にあきらめないで。私達の事、忘れないで。牛彦はまだ、見つかっていないんだよ！」

そこまで言った所でスイの体は急激に暗闇に引き戻された。

起きると、そこは風麟の家の居間だった。さっきの言葉は、絶対に織女に聞こえている。スイはそう思った。

織女は小屋の中で機を織っているときに、いきなり頭の中に、織女！という声が聞こえたので不思議に思った。

その声が、あのスイの声にあまりにも似すぎていたからだ。すると、その声はまたしても頭の中に響いてきた。

「ねえ、織女聞こえる？ 織女は今、神々の世界にいるのでしょう。戻ってくるのは難しいのだろうけれど、絶対にあきらめないで。私達の事、忘れないで。牛彦はまだ見つかっていないんだよ！」

そこからは何も聞こえなくなった。今のは、間違いない。スイの声だ。どうにかして、言葉だけ、スイが伝えてくれたのだ。織女はうれしくて、持っていた布をきゅつと握り締めた。あきらめるつもりは無いけれど、父様の監視下であるここからは、とうていぬけだせない。けれど、スイの言うとおり牛彦様はまだ見つかっていない。

織女はふと、顔を上げた。スイが、思っていた人、武長が亡くなってしまったが、武長は自分達見守ってくれているような気がする、と言っていたのを思い出したのだ。私も、その武長のように、この世界の、地上の、光となるうと思った。これなら、スイもタクスも牛彦も、全員を見守られる。織女は微笑んだ。スイ、聞こえる？ 私の言葉もスイの所までとどいて。織女は一言一言に願いをこめて言った。

「スイ、聞えますか？私です。ありがとうございます。私は、この世界から出る事はできません。私はこの世界と、スイ達のいる地上、両方の光となり、世界となります。姿として見ることはできないけれど、私はいつも、スイ、タクス、牛彦様を見守っております。」

光になってしまふのは、もうこの姿とのまま会えないのはやはり悲しい。けど、この世界から出ることは出来ないのだから、こっちの方がいいだろうと思った。織女の姿は光に溶けだした。織女の体は光の粒子となって、緩やかに四散していった。

スイは、起きあがると笑った。

「きつと、私の声は聞えたと思う。短い言葉しか言えなかったけれど、平気だと思うよ。」

スイは居間の床に転がった。疲れてしまったのだ。神に言葉を伝えるというのは、体力を使う。しばらくそうしていると、織女の声が聞こえた。

「スイ、聞えますか？私です。ありがとうございます。私は、この世界から出る事はできません。ですから、私はこの世界と、スイ達のいる地上、両方の光りとなり、

世界となります。姿として見ることはできないけれど、私はいつも、スイ、タクス、牛彦様を見守っております。』

スイは目を見開いた。まってよ、織女。私、さっきまた戻ってこられるようになって、言葉伝えばかりなのに。

「スイ、どうしたんだ？」

タクスのぞきこんで聞いた。スイは、今織女から聞いた言葉をみんなに言った。

「ねえ、光になったら、織女はもうもとの姿に戻れないの？光からまた姿をあらわすことはできないの？」

スイが風麟に聞くと、風麟は悲しそうに首を振った。

「舞い散ってしまった光の粒子から姿をまた見せることは出来ないの。たとえ織女自身がそう願っても。でも、天帝だけはまた姿を戻すことは出来るわ。」

「じゃあ、天帝にお願いしよう。天帝が神を作ったんだから、織女の父神が天帝なんですよ。このまま、直接牛彦に会えないですつといるなんて、織女がかわいそうすぎる。私だって、そんなの絶対に納得できない！」

スイは泣きながら言った。

「ええ、もちろん、天帝にお願いをしに行くのよ。」

スイはなぜかそのとき、織女がささのはが好きだと言っていたことを思いだした。

「ねえ、織女は何の植物が一番好き？」 「私は、ささのはが好きです。さらさらと揺れているささのはが。」

スイがそう考えていると、風麟が言った。

「でも、、、。二人だけではだめなのよ。神に会いに行くのは、そう簡単じゃないの。たくさんの方の願いで、やっと出来るような事なの。」

スイは、風麟の言葉を聞いてある事を思いついた。

「じゃあ、私、竹の里に行きます。母や父の力を借りて、里のみんなの力を借ります！」

「ああ、それはいいわねえ。私と飛虎と羽虎も行くわ。」  
スイは、さっそく準備をした。どれくらいかかるかはいたいわかつている。三日分の食料と水と火打石を持った。風麟は、書いてもらうための紙を用意している。行くのはなるべく早いほうがいい。でも疲れてしまつて今日中には行けないから、明日の朝に行くことにした。スイは寝床の中で、織女を思いだした。

早朝、スイ達は竹の里に向かって出発した。乙女山では、羽虎直伝の近道を通った。その途中スイは、見つかるたびにささのはをとっていった。少しでも、織女に近

ずきたかったのだ。採取しているうちに、両手いっぱいになってしまった。それでも取っていたので、見かねたタクスが持つてくれた。近道を通っても三日間はかかった。朝から晩まで歩きつづけ、竹の里に戻った時には足がくたくたに疲れてしまった。竹の里には、なんだかもう十年ぶりに戻ってきたような気がした。スイは自分の家に入つて元気良く

「ただいま。」

と言った。すると中からお母さんが出てきた。最初は驚き、少し嬉しそうな顔をしたが、みるまに怖い鬼のように怒っている顔になった。

「スイ、あんたいままでどこいつていたの！どれだけ心配したか、分らないの！！」

スイはその迫力にすくんだ。お母さんが怒鳴りつけたのはその時だけで、入つてからは静かに、スイをしっかりとつけた。静かな言葉に、たとえば様も無い恐ろしさが入っていて、スイは死ぬほど怖かった。二十分ほどたつて、スイもお母さんもおちついてからスイはお母さんに言った。

「ねえ、お母さん。心配かけたのは、本当に悪かったわ。ごめんなさい。でも、私の話も聞いて。」



そう言って、スイはいままでの事をすべて話した。その時になってやっと風麟達三人に気がついた。

「、、、て事なの。ね、お願い。みんなを説得して、お願いを書いてもらって。」

「スイ、その織女って子は、本当に神なのかい。あんだ、騙されているのではないのかい。」

「騙されてなんかいないよ。もし信じてくれないなら、ババサマの所に言って聞いてみて！」

スイはひっしで言った。お母さんは疑わしそうにしながら、ババサマの所へ行くといってくれた。スイはお母さんの手をひっぱりながら、ババサマの所へいそいだ。後からは、風鈴達もついてくる。

ババサマの家は里のはずれにある。ババサマは外に出て切り株に座っていた。スイは、ババサマの前に来ると、いつも少し空気がさがる気がした。

「ババサマ、スイがもどってまいりました。それで、スイはその、私になどは理解できないような事を言っているのですが、、。」

お母さんが少し困ったように言うと、ババサマが口を開いた。

「スイ、言ってみるがよい。」

スイは、お母さんに話したまんまの事をババサマにも言  
った。

「この人達が、私が話した風麟と飛虎と羽虎です。」  
ババサマはしばらく黙っていると独り言の様に言った。

「占に出ていたのはこの事か。これも神の事。よい、こ  
の竹の里は織女という神に協力しよう。明日、ここの広  
場に里の者を集めよ。」

スイはうれしくなった。その晩は風麟をスイの家に、  
飛虎と羽虎をタクスの家に泊めた。タクスもかなり怒ら  
れた様子だった。スイは明日、どうやって竹の里の人  
たちを説得しようか考えた。考えているうちに眠ってし  
まって、あつというまに朝がきた。朝、スイは急いで鐘  
の所へ行くと、ゴーンと鳴らした。またたくまに広場に  
竹の里の人たちが集まった。ババサマは竹の里の人全員  
に織女の事を話した。

「、、、、ということだ。これは、神のことだ。わしは織  
女という神にこの竹の里は協力しようとおもうのじゃ  
が。」

一人の男が、言った。

「協力とは、何をすればいいんですか？」

ババサマがスイとタクスを見たので、スイとタクスが立ちあがった。スイは風燐が持ってきてくれた紙を出した。その紙は薄い茶色で、少しざらざらしている。

「この紙に、織女への願いを書いてほしいんです。みなさんは、織女の事を知らないから、織女への思いは書けないと思うので、織女の願いを書いてほしいんです」

スイは必死で言った。ババサマがいいと言ったので、みなは協力しようと言った。

「いいですよ。」

「私も、協力しましょう。」

スイはほつとして座った。明日の夜に祭りを行う事になって、スイとタクスとお母さんで紙を配って回った。その時スイはお母さんに聞いた。

「ねえお母さん。私が黙って旅に出ちゃったこと、まだ怒っている？」

「そりゃあそうさ。いくらなんでもあんたがそこまですると思っただけだからね。でもやっぱり、スイが戻ってきたまえば、それで良かったと思ってしまうもんだね。」

スイは笑うと部屋に戻っていった。

次の日はからっからに晴れたいい天気で、スイは朝早くから起こされ祭りの準備をしていた。急に決まったことだったのでそりゃあ忙しく、余計な事を考えているひまはなかった。一人一人の家を回って紙を集めたり、やぐらを急いで、しかし間違えないように組んだりした。ささを立てるのも一苦勞だった。スイは人に会うたびに心配したとか、会えて良かったというような事を言われた。そのたびたびうれしくなってしまうほどだった。

あつというまに時間はすぎさり、涼しい風の吹く夕方になった。人々はこれから始まる季節外れの祭りをとても楽しみにしていた。どんな種類の物であれ、祭りはみんな好きだったのだ。ほどよい音色の楽の音も、浮かれた空気をきわだたせるのにちょうどよかった。その一方でスイは緊張でガチガチになってしまった。スイが、みんなの願いがこもっている煙を風ではこぶ事になったからだ。

いざ祭りが始まってみると緊張はすぎて、静かな気持ちになった。中心にはたくさんささのはに、里中の人々が書いた織女の願いが書いてある紙があさひもで結んであった。風麟と飛虎と羽虎が三方に立ち、なにごとか口の中で言った。そのとたん、マッチもないのにぼうつと

ささのほが燃えた。スイの体からスイの能力の部分が  
出た。スイは自分の体が下にあるのを見ると、煙をもらさ  
ないように注意して風を操った。これが難しかった。も  
らさないようにしようとしても煙は気体だから、すぐに  
隙間からでてしまう。すこしでも気をゆるめると、その  
ぶん煙はもれて消えてしまう。煙が出るたびにそっちへ  
風を運び、こっちへ風を運びと危なっかしくしながら上  
へ上へと煙を運んだ。右から風が吹いて煙が左になびい  
たかと思えば、煙が気まぐれを起こしたかのように右へ、  
下へと予想もしていないような所へ行こうとする。吹い  
てきた風は操る風にかえ、でていく煙は風でおおう。少  
し余裕ができて下を見ればたくさんの人が突然のことに  
目を丸くしているのが見える。今は一人一人の表情が風  
見て取れるが、登っていくうちに小さくかすんできて、  
ありのようになつた。下からも絶え間無く新たな煙が出  
てくる。その煙ももらさないように上へ運ぶ。頭がゆら  
ゆらと揺れて、意識がとぎれそうになる。スイはそのた  
びに織女の事を思い出し、くつと力を入れた。その時、  
急に武長の事を思い出した。

武長、私今こんなにかんばっているんだよ。だから、  
こんな所で気を失わないように、応援しててね。

スイは武長が見守っていてくれるような気持ちになつた。そして、織女に語りかけた。

ね、織女。好きな人がいるっただけで、こんなにも励ましてくれるんだよ。絶対に、会いたくなるよね。

こんなにたくさんさんの願いを体いっぱい抱いている。それだけで、温かい気持ちになれる。煙は一箇所に吸い込まれるようにして見えなくなつた。とうとうささのは燃え尽き、最後まで細々と出ていた煙もなくなつた時には、スイは疲労しながらも満足感にひたつていた。煙に巻き込まれそうになつたのも一度や二度ではなかつた。それでも、ちゃんと出来た。私のとりえは、あきらめな  
い事なんだから。スイは下にある自分の体に戻つていつた。スイは起きようとしたが、体が鉛のように重く感じられて動けなかつた。息は不自然なほど上がっていて、頭の芯は今やずきずきしていた。どうしようもなく疲れ  
てしまつて、ああむけになつたままスイは満天の星空を見上げた。

天帝は織女が消えてしまつた場所を見つめていた。しすぎた事だったのかもしれない。だがこれは織女への神としての罰だ。神が人間世界へ行く事は掟に反する。

それをおまえは知っていただろう。そこまでしてあの男のもとへ行きかけたのか、、、。

ため息をついた時下方から普通の物とは違う煙が上つてくるのを見た。その煙には、何人もの織女への願いがこもっていた。そこにはひととき強い、思いが二つあった。『織女、またもとの姿に戻って！私は、そのままの織女が好きなの！』『牛彦だって、直接織女に会いたいと思う！』

「あの、人間たちか。」

その願いは、天帝の心を揺り動かした。心のすみで、天帝もそう思っていたのかもしれない。そして、里の人々の願いはずっと会えないなんてかわいそう。織女と会わせてあげて！というものだった。光となってしまう織女をもとの姿に出来るのは天帝である自分だけだ。天帝は悩んだすえに、人間達にめんじて織女を牛彦に会わせてやろうと思った。

織女は、満天の星空の中に立っていた。傍らには、星の川が流れている。織女にはここがどこなのかわからなかった。確かに自分は、光となってなくなったはずなのに、なぜかここに姿をとって立っている。

「織女。」

父様の声がした。では、父様が、してくれた事なのか。でも、なぜだろう。その時織女は何人も人の願いがこもった煙がそこらじゅうに満ちているのに気がついた。そして、そこにある強い二人分の思いも、。

「スイ、タクス、、、。」

織女は思わず声をうるませた。自分のために、ここまでしてくれたなんて。ありがとう。かすかに残っているささのはの匂いが、織女の鼻をくすぐった。

「織女、この煙に気づいたであろう。我は、その願いに答えてやろうと思う。織女、一年に一度人間世界で言う七月七日、に牛彦にあわせてやろう、、、今日が、七月七日だ。」

一瞬、言葉の意味が分からなかった。理解した時、織女は目を見開いた。

「父様、、、。」

織女が言いかけたときだった。

「織女」

織女が声に振り向くと、そこには探しつづけた牛彦が、立っていた。



スイはたくさんの人達の中、織女がありがとう、と言ったのが聞えたようなきがした。スイは空を見上げ、微笑んだ。空には星が作った川が流れている。

スイは、タクスの中でを掴むと人々が楽しんでいる祭りの中へと入っていった。